

2 ヒトの近くの自然

飛び出すエゾシカ

あっ、危ない！ オスジカが道路に飛び出してきました。近年のエゾシカの爆発的な増加により、シカと自動車の交通事故が増えています。列車と衝突したり、線路にシカが入りこんでダイヤが乱れたりなど、鉄道の被害も相当な回数に上ります。農作物が食べられる被害は甚大で、被害額は年間数十億円に上っています。増えすぎたシカが冬に樹皮を食べるため木が枯れるなど、生態系にも大きな影響を及ぼしています。しかし、シカの増加はヒトの活動にも原因があることを忘れてはなりません。

19世紀後半に本格的な開拓がはじまったころの北海道は、大部分が森で覆われていました。しかし、現在では平野の大部分は市街地や農地に変えられています。残された森林も、原生林とよべる森はほとんど姿を消しました。

それでも、人口200万人近い大都市・札幌市内にもヒグマのくらす森があり、住宅地にヒグマが現れることもあります。ヒトの生活圏と豊かな自然が隣り合っているのが、北海道の特徴といえます。ヒトも生き物どうしのさまざまな〈つながり〉から無縁ではありません。ヒトの活動は、近くに住む生き物のくらしに影響を与えることもあります。その一方、生き物の存在が、ヒトのくらしに影響を与えることもあります。

19世紀終わりごろには絶滅寸前だったエゾシカが、近年急激に増えてきたのは、牧草地などの食べ物が得やすい場所や、越冬に向けた植林地が増えたことも原因と考えられています。

ヒトの生活の影響で生態が変わった動物もいます。道路脇でエサをねだるキツネの姿を見かけるようになりました。本来は海岸の崖^{がけ}などに巣をつくるオオセグロカモメが、札幌中心部のビルの屋上で子育てすることも増えました。

^{がいらいしゅ}外来種の増加は大きな問題です。セイヨウオオマルハナバチは、温室栽培のトマトの授粉のために導入されたものが野生化し、急速に広がりました。エゾオオマルハナバチなど^{ざいらい}在来^{ざいらい}のマルハナバチの仲間とは、蜜をめぐる競争関係にあります。もし在来^{ざいらい}のマルハナバチがいなくなれば、そのハチに花粉を運ばせていた植物にも影響が出ます。

何十万年という長い時間の流れのなかでつくられてきた「生き物たちの北海道」は、ほんの百数十年で大きく姿を変えました。ヒトとほかの生き物はどうすれば一緒にくらしにいけるか考えていかなければなりません。

ヒトの近くで生きる

北海道では、市街地や道路のすぐ近くにも、大形の動物がくらしています。エゾシカによる農業被害や交通事故。食べ物を求めて山から下り、市街地に出てくるヒグマ。動物たちとヒトの距離が近すぎると、時にはそれぞれの都合がぶつかることもあります。ゴミをあさるキツネやハシブトガラス。海岸の崖^{がけ}のかわりにビルの屋上で子育てするオオセグロカモメ。人の近くで生きることを選び、人の活動をうまく利用している生き物もいます。



新たな侵入者たち

外国や本州などからヒトが持ちこんだ生き物を「外来種」とよびます。北海道でも近年は外来種が増えています。外来種の侵入・定着は、ヒトのくらしに悪影響をもたらす場合があるほか、生態系に大きな影響を与える危険性があります。アライグマは北海道のほぼ全域に広がり、トウモロコシやイチゴを食い荒らすなどの被害をもたらしています。野幌森林公園では、アライグマの侵入によってアオサギが巣をつくらなくなり、また、エゾサンショウウオが大量に食べられています。

